

二〇二一年度 入学試験問題

国語 (六十分)

- ・問題は「一から三」まであります。
- ・解答はすべて解答用紙に記入しなさい。
- ・解答用紙は一枚です。

一 次の文章を読み、あとの間に答えなさい。

A ¹ メールは単なる挨拶で、しかも要件だけを伝えるコミュニケーションツールです。相手とのタイムラグもあります。

一方、対話は相手との間で同時発話的に進みますから、その過程で何が起こるか分かりません。可能性は無限にある。相手から問い返されたら、そのたびに的確な答えを用意しないといけませんし、自分の考えが変わることがあるかもしれない。ところが、対話の内容そのものも、メールのように要点だけを聞いた話したりすればいいという感覚の人もいるようです。

要点というのは「意味」です。でも、実際に必要なのはお互いを知り合う時間と、可能性。私たちは「こいつは口ではこんなことを言っているけど、本当は違うことをしたいんだろなあ」などということも慮りながら、あえて言葉には出さずに対話をしています。メール的な対話では、相手のそういう気配を読み取ったり、利用したりする社交技術のようなものが完全に抜け落ちてしまいます。つまり、言葉の一つひとつから伝わる意味だけを、非常に狭くやり取りすることになるんですね。

【 i 】 人間がカク^aトクした言葉という道具は、意味を伝えるには非常に有効な方法ですが、相手の気持ちや人格を判断するには不十分だったのでしょうか。

言葉は人間が最後に手にしたコミュニケーションのツールで、しかも登場したのはせいぜい数万年前ですから、人類の七〇〇万年の進化史から考えると、極めて最近に当たります。きっと人間はまだ言葉という道具を使いこなせていないのでしょうか。言葉だけで相手を評価したり、人格を理解することができない。それどころか、言葉を使って自分をあますところなく表現することだってできないのですから。

だからこそ、フェイス・トゥ・フェイスのコミュニケーションはなくてはならなかった。とりわけ相手の目の表情をきちんと読むために、対面の時間を長く取る必要があったと考えられます。〔 W 〕

人間にとって言葉が先か、対面が先かは、まだ明らかになってはいませんが、たぶん対面が先だろうというのが私の考えです。

【 ii 】 言葉が意味だけを伝えるものだとしたら、われわれは会話をするときに対面する必要はありません。背中合わせに話してもいいし、お互いに明後日の方向を向きながら話しても問題はないはず。今は携帯電話ができたために、対面せずとも話せる場面が増えてはいますが、しかしシチュエーションの面接や商談のような重要な場面では、やっぱり私たちは直接会って相手の顔を見ながら話をします。

人間は言葉でいろいろなシグキを与えながら、相手の表情や目の動きを読み、相手の気持ち———^{たが}どういうときに相手が昂るのか、どういうときに怒るのか、どういうときに優しい気持ちを抱くのか、ということを判断してきたのでしょうか。

B ですから、本来、会話は対面のためにあった。もしくは、対面と相補的な関係にあったと言えるのかもしれない。

【 iii 】 人間は対面的な交渉を非常に重視したために、それを長引かせたり、アクセサリーや調度で飾ったりしながら、コミュニケーションをくくり上げてきたのではないのでしょうか。

たとえば、お見合いの席には壁に絵が飾ってあったり、床の間には四季折々の生け花や掛け軸のようないろいろの調度があります。そして、お決まりのように外には庭園がある。何もない空間に二人で座らせたらしんどいからです。それが場の設えというもの。初対面の人と相對すれば、緊張して会話が弾まないことも少なくありません。それがお見合いの場ならなおさらです。そんなときに「お花、きれいですね」などと、話の口火を切らせてもらえるようなものがあつたり、壁に掛かる絵を見て最近訪れた美術展の話をするというように、話のヒントになるようなものが鑿められている調度品に助けてもらえる。「X」

人間はサルと同様、視覚が優位な動物です。気になる情報が耳に入れば、実際に自分の目で見ないと気が済みません。「火事だ！」という声が聞こえれば、現場に駆けつける野次馬がいる。恋人が浮気をしているという情報を友人から聞いたとしても、現場を押さええないことには、どこか半(一)半(一)だし、スリは現行犯しかあり得ないように、見なければ証明できないことも多い。われわれが帰るところはやはり視覚的な情報なのです。人間にとつて「見る」ということが真実を知ることですから、対話の際にも、言葉のような音声の他に、視覚に映るさまざまな「構え」が必要なのです。

対話の基本は、実は構えだと私は思っています。深刻な話をされている最中に、足を組み、ふんぞり返って聞いている人は滅多にいません。膝を揃えて畏まって座れば、その態度は時に言葉以上に相手から評価されることをみんな知っているからです。

他にも、言葉以外の情報から受け取るものといえば、「品格」が挙げられるでしょうか。

野生のゴリラを見るなかで私を感じたのは、ゴリラのドラミングが歌舞伎の見得とそっくりだということです。彼らは一步も引かない、という構えをする。相手に対して頑と自己主張をし、相手と対峙しようという態度。しかも、興味深いことに、ドラミングは相手への攻撃に必ずしも繋がるわけではありません。きちんと相手との間にバッファ(緩衝装置)を設けている。とくにシルバーバックの構えにはほれぼれするような品格を感じます。

【iv】、オオカミが牙を剥き出して迫ってくる様子は獐猛だとは思っても、品格を感じることはありません。ゴリラのように相手との間にきちんと距離を置く。そして相手の出方を待つ。そういう抑制力と許容力から醸し出される余裕に、われわれは品格や美を感じるのではないのでしょうか。「Y」ゴリラの場合も周りに誰もいないところで単にドラミングをしても、さほどイゲンは感じられないでしょう。彼らがドラミングをするときには、だいたい周りのメスや子どもたちを意識しています。自分に注目が集まっているのも彼らは知っています。そのなかでドラミングをして目立つという行為が、周りを唸らせるような美しさを感じさせるのかもしれないといけなわけです。

泰然自若とは自分だけでできるものではなくて、人がそう感じてくれるからこそ、泰然自若たり得る。自分は泰然自若としているつもりでも、単なるのんびり屋に見えたり、何も考えていないかのようにアホに見えたりする可能性もある。つまり、品格を感じさせるということも、実は無言のコミュニケーションの一つというわけです。「Z」

(山極寿一『京大総長、ゴリラから生き方を学ぶ』より)

(注) ※ドラミング……動物が鳴き声以外の方法で音をたてる動作。

※シルバーバック……背から腰にかけての毛が白くなっている成熟したオスのゴリラ。

問一 二重傍線部 a s f について、カタカナのものは漢字に直し、漢字のものはその読みをひらがなで記しなさい。

問二 「i」 s 「iv」に入る最も適当な言葉をそれぞれ次の中から選び、記号で答えなさい。ただし、同じ記号を重ねて用いてはならない。

イ たとえば ロ しかし ハ もし ニ ですから ホ おそらく ヘ たしかに

問三 波線部① s ③の意味として最も適当なものをそれぞれあとの選択肢から選び、記号で答えなさい。

① 明後日の方向

イ 足の方 ロ 後の方 ハ 違う方 ニ 上の方 ホ 東の方

② 話の口火を切らせて

イ 気まずさを紛らして ロ 緊張感を持たせて ハ 口論を仕向けておいて ニ 最初に話を始めさせて

ホ 互いに間を持たせて

③ 泰然自若

イ 十分満ち足りて ロ のんびり構えて ハ 不満を隠し ニ 目を閉じるように ホ 物事に動じない

問四 傍線部1「メールは単なる挨拶で、しかも要件だけを伝えるコミュニケーションツールです」とあるが、「メール」という「コミュニケーションツール」に欠落しているものは何か。A文中から三十四字の部分を探し、その始めと終わりの四字を抜き出して記しなさい。

ツール」に欠落しているものは何か。A文中から三十四字の部分を探し、その始めと終わりの四字を抜き出して記しなさい。

問五 傍線部2「フェイス・トゥ・フェイスのコミュニケーションはなくてはならなかった」とあるが、それはなぜか。最も適当なものを次の中から選び、記号で答えなさい。

イ フェイス・トゥ・フェイスのコミュニケーションが言葉の足りない部分を補ってくれるから。

ロ フェイス・トゥ・フェイスのコミュニケーションは相手とのタイムラグを生じさせないから。

ハ フェイス・トゥ・フェイスのコミュニケーションが要件を正確に伝えるには適しているから。

ニ フェイス・トゥ・フェイスのコミュニケーションは人間が最後に手にした手段であったから。

ホ フェイス・トゥ・フェイスのコミュニケーションこそ相手の虚偽を指摘する証拠となるから。

問六 傍線部3「相手の目の表情をきちんと読むために、対面の時間を長く取る必要があったと考えられます」とあるが、それはなぜか。次の答えとなる文の空欄に入る表現をA文中から十字以上十五字以内で探し、抜き出して記しなさい。

▼相手の目の表情から、() ためには十分な時間が必要だから。

問七 傍線部4「それを長引かせ」とあるが、長引かせるのは何のためか。次の答えとなる文の空欄に入る表現をA文中から十字で探し、抜き出して記しなさい。

▼() を確保するため。

問八 傍線部5「視覚が優位な動物です」とはということか。最も適当なものを次の中から選び、記号で答えなさい。

イ 人間は聴覚が発達していないので、物事を理解する時には視覚的な情報を優先するということ。

ロ 人間は視覚が発達しているので、物事を理解するには視覚的な情報に頼る習性があるということ。

ハ 人間は視覚的な情報によって物事を正確に理解しようとする傾向があるということ。

ニ 人間は視覚的な情報からしか物事を評価できないという特徴があるということ。

ホ 人間は視覚的な情報がなければ物事を理解できないという感覚があるということ。

問九 傍線部6「半()半()」とあるが、本文の内容を踏まえ、() に適当な漢字をそれぞれ入れて四字熟語を完成させなさい。

問十 傍線部7「きちんと相手との間にバッファ(緩衝装置)を設けている」とあるが、「バッファ(緩衝装置)」とほぼ同じ意味で用いられている言葉をB文中から探し、抜き出して記しなさい。

問十一 傍線部8「ドラミングをして目立つという行為が、周りを唸らせるような美しさを感じさせる」とあるが、ゴリラのドラミングのどのような美しさを感じるのか。答えとなる部分をB文中から十五字以上二十字以内で探し、その始めと終わりの四字を抜き出して記しなさい。

問十二 次の文章を本文中に入れるとしたら「W」も「Z」のどこが最も適当か。記号で答えなさい。

▼歌舞伎の舞台を考えてみてください。たった一人で見得を切つてもしょうがない。観客がいて、舞台上にも自分に注目している別の役者がいる。そういうなかで見得を切るあの姿がひとときわ際立って見える。周囲の態度が一体となつているからです。しかも、拍子木に似た柝きで板を打つツケが調子良く「バタバタ」と打たれて場が最高潮を迎える。観客席からは「松島屋！」と声が掛かったりもする。

問十三 本文の内容と一致するものを次の中から一つ選び、記号で答えなさい。

- イ メールは人と人との関係の豊かさを損ねるので、できるだけ用いないようにするべきである。
- ロ 人が言葉をうまく使いこなすことができないのは、人がまだ進化の途上にあるからである。
- ハ 対面している相手の表情や目を見ることによって、人は相手のすべてを知ることができる。
- ニ 他者からの視線や評価を気にしてしまうのは、他の動物にはない人間に特有の現象である。
- ホ ゴリラと人との共通点として、周囲の目を意識して行動するという点を挙げるができる。

二 次の詩を読み、あとの問に答えなさい。

こわがらない

茨木のり子

一 芸に¹ 関けた人は

物をこわがらない

老練の仕立屋は

おそれもなく高価な布をザキザキ切る

突き抜けた画家は

純白の画布の前でたじろがない

鼻唄まじりの落書きにみえる

すぐれた外科医のメスは

静かにすばやく暗がりのお医者さんごっこのように何気ない

フルートの名人の

無雑作な第一音 ^{※がすみ}霞くうほどの

魅力ある俳優は

空間をこわがらない むしろ空間が俳優に吸いこまれ

一点の火となつて燃える

おそるべき慎重さは消されたように見えず

大胆不敵さばかりが

さつと波立ってみえるのだ

一つの道を² 窮めた^{きむ}ひとには

物のほうが² 嬉々として吸いついてゆく

いいチームのサッカーのボール

陶芸家の手にまつわりついてゆく陶土

腕のたつ大工の削った板はびたと吸いつく二枚

むかし飛驒ひだにはそんな大工がごろごろいた

皿まわしの大皿は棒3に接着剤3でもついているように粘る

※3 鯉こいとりまーしゃんにはなんとした

鯉こいのほうを抱かれたがる

物か人かの間あわひ

あれは何だろう

知らずに物を吸いつかしまる渋い華やぎ

あれは何だろう

ともに上等のセクシュアルな眺め

私の使うものは言葉だ

私は言葉をこわがらないか？

否

私は持っているだろうか？

知らず言葉たちをひきよせる磁場を

否 否

4 い未だいしの歎なげきとともに

5 こわがらない人達ぼうぜんを呆然ぼうぜんと視みる

〔茨木のり子詩集〕より

(注) ※霞くうほどの……浮世離れしている生活のたとえ。

※鯉とりまーしゃん……かつて福岡県久留米市にいた鯉の素潜り漁の達人。

三 次の文章を読み、あとの問に答えなさい。

昭和三十年の夏。主人公の和子は家の馬の世話をしていたが、その中でもワカという馬を特に和子は気にかけていた。しかし、ある夏の日、ワカを含む家の馬七頭は、花島に昆布運びのために働きに出っていたが、その夜、花島に台風がおそった。次の文は、台風が去った後の朝の場面である。

朝が完全に明けきる前に、来客があつた。花島で馬を使役している網元らの顔役^①だつた。雨の中を急いで馬を走らせてきたのか、玄関前に留められた馬は雨に濡れながら白い湯気を上げてている。顔役は全身ずぶ濡れで、極度の疲労と憔悴^{※しよすい}を張り付けていた。

和子も茶の間に入ろうとしたが、ただならぬ雰囲気と「部屋に行つてれ」という祖父の鋭い一言で、何か悪いことが起きたのだという予感がした。茶の用意に立つた母の顔は強張り^{こわば}、青白くさえ見えた。

人払いをした茶の間からぼそぼそと、祖父と顔役の重い声が漏れ出てくる。「昨日」「崖が」「どうしようもねえ」「助けらんねえ」といった声だ。和子は布団から身を起こし、襖^{ふすま}の近くに座つて隙間^{すきま}から様子をうかがう。真剣な話し合いのようだ。

二人とも、「馬」とは言わなかつた。「あれら」「あいつら」と呼んでばかりで、あえて核心から逃げるようにその動物の名を伏せる。しかし和子には確かに、花島の馬について話しているのだと分かつた。

和子は体を流れる血が急に温度を下げていったように感じた。手指の隅々にまで冷たく行き渡り、筋肉をこわばらせて呼吸さえ苦しくする。嫌な予感がした。もう台風を中心は去ろうとしているのに、何かもつと嫌で危険な物事が迫っている気がした。

一時間の後、話し合いを終え、顔役が帰り支度を始めた。席を立つ前と玄関を出てからの二回、祖父に腰から折り曲げた深い礼をした。顔役が自分達に頭を下げるなど和子にとっては初めて見る事だつた。

和子が着替えて茶の間に入ると、茶碗^{ちやわん}を片づけている母が明らかに青い顔をしている。祖父はどかりと座りこみ、項垂^{うなだ}れたままで絶え間なく煙草^{たばこ}をふかし続ける。和子はその背に向かつて、かける言葉を探した。余計なことを言つて叱られる可能性を考えながら、それでも、和子は「X」を問う一言を發した。

「おじ。花島の馬、なんかあつたの？」

祖父の背中では答えない。答えを拒んでいるのか、返答を思索しているのかは分からない。返答を促すように、和子ほもどかしく言葉を重ねた。
「ねえ。ワカは。ミコは。うちの馬と、隣の次郎坊^{じろぼう}や、みんなは。馬はどうかしたの？」

沈黙の一秒一秒がひたすら重かつた。やがて祖父がひとつ息を吸い、何倍もの時間をかけて【 i 】吐き出す音がした。

「ゆんべの台風で、花島で崖崩れが起きた。下の船着き場まで下りる道、全部崩れたそうだ」

崩れた。その言葉を聞き、和子は明け方の大きな音を思い出した。眠りから引きずりだされたあの、大きな海鳴りのような音。まさかあれが。「もう崖の上にいた馬、下には降ろされねえ」

「ワカは」

「ワカも駄目だ」

駄目。その意味を察して和子の心臓が跳ねる。馬と花鳥をよく知る祖父と顔役が、一時間以上も話し合っ出て出した結論。和子の息が自然、荒くなる。【 ii 】、腸の病気で死にかけた馬を散々看病し、その果てに祖父が「もう駄目だ」と言った場面が思い起こされる。

まだ今現在、生きている。しかし【 iii 】助けられない。もう、自分達の力は及ばない。その意味において、駄目という意味が暗く響く。

「俺らは結局、馬、使い潰さねば生きてかれねえんだ」

祖父はゆっくりと語った。

「俺らは、最初の最初²から。そういうもんなんだ。だから変えられねえんだ」

己に刻み込むような言葉だった。刺青のごとく、痛みと共に刻み付けるような。

和子は馬を諦めてしまった祖父に言いようのない怒りを覚えた。ほとんど初めて、祖父を殴りたい衝動にさえ駆られた。かつて嵐の夜、祖父は自分に馬を探しに行けと言った。そして恐れを超えて見つけ出し、ワカをきちんと連れ帰った。

おじじもそうすればいい。

和子はそのままで言いかけた。災禍の規模が違うとか、そもそも助け出せるものではないとか、そんなことは和子も分かっている。長く馬と接してきた顔役や祖父が助けられないと言うのであれば、半端な崖崩れではない。致し方ないのだとも。それでも、どうあっても祖父に言いたかった。馬を助けよ、助けねばだめだ、と。

それでもかろうじて、見たこともない小さい祖父の背中を見、全力でもって直截の言葉だけは抑えた。祖父を詰りたい自分の気持ちと、あれほど馬を大事にしてきた祖父の無力感を天秤³にかけ、決定的な一言⁴だけはかろうじて堪えた。

しかし、和子は無意識のうちに唇を噛み、その痛みを感じながら、選んだ言葉を腹の底から絞り出した。自ら、呪詛^{※じゆせ}のようだと思った。

「おじじ、これまであんなに、あんなに、馬、大事にすれって言ったべや。いつつもいつつも、言ってたべや」

言葉の最後は掠れた。言い放つのに躊躇いはあった。祖父が馬をいかに大事にしてきたか、それを知りつつ【 iv 】責める、その非道さを和子は知っていた。そしてそれでも、責めずにはいられなかった。

怒鳴り返されるのを覚悟して和子は身を固めたが、祖父は背中を向けたまま黙っていた。更なる責めがあっても進んで負おうとしているようにも見えたが、和子はもう口を噤んだ。家族たる、財産たる馬を見捨てねばならぬ祖父の多大な心痛が、その背からにじみ出ている。やがて祖父は大きな溜息を

ついた。消え入りそうな最後は、^③嗚咽おえつのようにも聞こえた。

「⁵及ばれねえ。及ばれねえモンなんだ。もう、だめだ……」

言葉からは軋きしむような痛みが漏れていた。あの夜、行方をくらました馬のために怒った面影はどこにもない。その背は小さく、ただの憐あわれな老人に見えた。

そのまま縮んで固くなり、やがて一個の石になってしまえばいいのに。和子はそう思った。私の掌てのひらに収まるぐらいに縮まったら、海へと投げ捨ててあげる。落石の岬から、花島にいる馬達の方に向かって力の限りに。そして波頭に砕けて沈めばいい。私もその後を追うから。何もできずにいた、馬に何もしてやれずにいるこの私も、花島の下でいつそ朽ちてしまいたい。

一度、馬を運ぶのを手伝い花島に渡った時のことを思い出す。縄をかけて馬に海を泳がせ、苦勞して船で引張って島まで運ぶのだ。初夏で、浜から崖を登って辿たどりついた平原は若い緑に溢あふれていた。そこかしこで遅いスカシユリやアヤメが咲いていた。

海水に濡れた体を震わせ、その平原で草を食はむ彼らの姿は自由そのものだった。強い風に吹かれるまま鬣たがみを乾かし、己の望むままに走り抜ける。初夏の青空の下で見たその風景を、和子はひどく懐かしく思い返した。可能な限り細部まで。馬が自由に島を駆け、彼らの懐かしい体臭が風に乗ってそよぐ様さまでさえ。

もう二度と取り戻せない彼らは、あの場所に留まり、自由で、奔放ほんぽうに生き、そしていずれみな死ぬだろう。

「ワカ」

もう届かない名を呼んで、和子は祖父に背を向けしやがみ込んだ。⁶沈んだ室内は二人分の嘆きと後悔と慟どらう哭なきに満たされたが、けっして互いに交わることはなかった。

(注) ※憔悴……やつれること。

※呪詛……のろいこと。

(河崎秋子『颯風さかぜの王』より)

問七 傍線部4「決定的な一言」とあるが、

I 「一言」の内容を具体的に示した部分を本文中から十三字で探し、抜き出して記しなさい。

II 和子がこの「一言」を言わなかった理由が読み取れる最も適当な一文をこの部分より後の本文から探し、始めの四字を抜き出して記しなさい。

問八 傍線部5「及ばれねえ」の前に入れる言葉として最も適当なものを次の中から選び、記号で答えなさい。

- イ 台風には □ 運命には ハ 家族には ニ 生活には ホ 財産には

問九 傍線部6「沈んだ室内は二人分の嘆きと後悔と慟哭に満たされたが、けっして互いに交わることはなかった」とあるが、この部分について五人の生徒が話し合っている。その中で解釈として適切な発言を、次の中から二つ選び、記号で答えなさい。

イ【生徒A】傍線部の二人とは和子と和子の祖父を示しているけれど、二人とも馬を取り戻すことができないことについて嘆いている点は共通しているよね。

ロ【生徒B】ただ、二人の嘆きの理由は違っているから「互いに交わることはなかった」と表現されていると思うんだけど、和子が馬のワカを失ったことについて悲しんでいるのは間違いないよね。

ハ【生徒C】そうだね。それに顔役の意見をそのまま受け入れてしまって、言い返すことのできないでいる祖父についても、和子は残念でならないと思うよ。

ニ【生徒D】一方で、祖父が嘆く理由だけど、それもやはり祖父自身、馬とともに生活してきたことが関係しているよね。祖父が馬を大切にペットとして扱う姿勢は和子にも影響を与えているはずだよ。

ホ【生徒E】でも、どんなに馬が大切だからといって、その馬を助けるために和子を花島に向かわせることは祖父にはできないだろうし、だからこそ嘆きも深くなるんだろうね。

以下余白

